

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

制度としてのソビエト民族学：
隣接分野との関係，周辺諸国における影響：
旧ソヴィエト考古学における民族起源論の系譜

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 博文 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001247

旧ソヴィエト考古学における民族起源論の系譜

加藤 博文

北海道大学大学院文学研究科

本論は、ソヴィエト考古学を特色づける理論および方法論であった「民族起源論」の系譜について考察したものである。従来、「民族起源論」は、ソヴィエト考古学の中において、その性格や特質が論じられてきた。しかし、この「民族起源論」は、1917年のロシア革命以降に突如として出現した訳ではない。19世紀から20世紀にかけてヨーロッパ近代国家における考古学の形成過程では、それぞれの民族の歴史を追及する過程において文化圏論や民族理論が熱心に論じられた。この動きはロシア考古学においても例外ではなく、その形成期においてスラヴ民族の起源を追及する「民族の考古学」が論じられた。

本論では、ロシア革命以前の帝政期におけるロシア考古学の知の潮流の中を整理する中から、「民族起源論」の系譜について考察を巡らせた。その結果、「民族起源論」の萌芽は、19世紀のブランデンブルクなどによる物質文化資料を通じたスラヴ民族集団の探求や、全露考古学大会を通じたスラヴ民族や非スラヴ民族についての「民族の考古学」の形成の中にその起源を見出すことができることを指摘した。また更にその流れが20世紀初頭のスピーツィンやゴロドツォフの「エトノス」を追及する考古学へと継承され、「民族の考古学」から「民族起源論」へと連動している点を指摘した。

- | | |
|--------------------------------|----------------------------------|
| 1 はじめに | 4.1 第3回考古学大会（キエフ）——スラヴ考古学の形成 |
| 2 ソヴィエト考古学の特質とは | 4.2 第4回考古学大会（カサン）——フィン・ウゴル考古学の形成 |
| 3 革命以前のロシアにおける考古学の形成 | 5 ロシア考古学における民族学派の形成 |
| 3.1 学術探検の時代（1700～1825年）のロシア考古学 | 5.1 ヨーロッパ考古学における民族学派の勃興 |
| 3.2 アレーニン期——帝立ロシア考古学協会の創設 | 5.2 革命以前のロシア考古学における民族理論 |
| 3.3 ウヴァーロフ伯爵と考古学大会の組織化 | 6 ロシア考古学からソヴィエト考古学へ——民族起源論の系譜 |
| 4 「民族の考古学」の形成——1870年代の様相 | |

*キーワード：民族起源論, ソヴィエト考古学, ロシア考古学史, 民族の考古学

1 はじめに

考古学の歴史は、古くは古典期ギリシャやローマにおける古美術の蒐集に辿ることができる。しかしながら、近代国家において近代科学の一部として成立する考古学には、単純な古代への憧れや趣味的世界に留まらない別の姿が見いだせる。ある意味で「国家と民族の時代」でもあった19世紀から20世紀の近代国家において考古学の役割は、特定階層の知的趣味を満たすものから大きくその役割を転換し、民族ナショナリズムと密接に結びつきながら国民アイデンティティの形成という新たな役割をもつにいたる(Shennan 1991)。考古学は、現存する民族のみではなく、過去の歴史的民族をも同定することができる科学であると主張することによって、国家にとって国民意識の形成に寄与する重要な学問の1つとして認識されるようになったのである。近代国家諸国において国の庇護の下、考古学の研究組織がこの時期に設置された背景には、国民国家とナショナリズムの形成が色濃く反映されている。このことを現在さまざまな文脈と立場において考古学を実践する我々は、十分に自覚しなくてはいけないであろう。

本論の目的は、近代以降の考古学の歴史の中で特異な位置を占めると評価されてきたソヴィエト考古学において、主要な研究課題の1つであった民族起源論の系譜を考察することにある。筆者は、かつて民族起源論(Ethnogenetics)と呼ばれる理論のソヴィエト考古学の中での展開について、ソヴィエトの民族政策との関わりが深いシベリア地域に関して部分的に考察したことがある(加藤 1999; 2000)。

しかし、その後ロシア考古学史を紐解く中で、ソヴィエト考古学における民族起源論を論じるためには、ロシア革命以前の帝政ロシア期におけるロシア考古学の成立過程を含めて考察することが不可欠であると考えに至った¹⁾。民族起源論は、ソヴィエト考古学を代表する研究パラダイムであり、その独自性を反映したものと理解されてきたが、果たしてそれは社会主義政権下に特有の研究の流れであったのか、それとも近代考古学の発達の流れの中で考える必要があるのだろうか。改めて検討してみる必要がある。

よって本論では、改めてロシア考古学の成立過程から社会主義国家の成立期にかけての変遷を追うことから、所謂ソヴィエト考古学における「民族起源論」——バルキンらの定義によれば「考古民族起源論(Archaeological ethnogenetics)」であるが(Bulkin, Klejn and Lebedev 1982)——の系譜をロシア考古学史の中に辿っていくこととする。

2 ソヴィエト考古学の特質とは

1991年の旧ソ連邦の崩壊は、独自の理論と手法を有したソヴィエト考古学の終焉でもあった。世界の考古学における知の潮流において、ソヴィエト考古学が特異な位置を占めてきたことは、概ね異論がないであろう(Trigger 1989: 207-243)。その特質は、

単に、考古学がマルクス・レーニン主義に基づく社会主義国家で展開されたということに留まらない。ソヴィエト考古学の最重要主題は、人類史の発展段階史観を実証的資料に基づいて証明することであり、それは学問という領域に留まらず、マルクス・レーニン主義をテーゼとするソ連という国家にとって重要な政策の一部であった。考古学が国家の政策と密接な結び付きを持ってきたという点に、ソヴィエト考古学の最も大きな特徴があるといえる。

ソヴィエト考古学の特徴については、すでに幾人かの研究者による指摘がなされ、一般的には、人類史の発展段階と社会的側面の解析に比重を置くものであるという評価がなされている。ロシア考古学を外側からの視点として評価したものにトリグガー (B. Trigger) の著作『考古学的思考の歴史』がある。その中で、彼はソヴィエト考古学が生み出した功績として、(1) 集落構造の把握をめざす集落考古学の視点と、(2) 社会的側面への積極的なアプローチを挙げている (Trigger 1989)。またソヴィエト考古学の内部からの評価としては、レベジェフ (G. S. Lebedev) によるものがあり、(1) 自然科学的思考の導入や、(2) 総合科学として考古学の構築を目指す点にその特徴を見出せると述べている (Lebedev 1992)。

更にソヴィエト考古学の構成と全体的な特徴をロシア人考古学者の視点から評価したものとしてバルキン (B. A. Balkin) 他による論考と、レベジェフによるまとめを挙げることができる (Balkin et al. 1982; Lebedev 1992)。それらに依れば、ソヴィエト考古学の研究の潮流は、以下の7つの領域に整理されるという。

- (1) 考古歴史学 (Arkheologicheskaya Istoriya)
- (2) 社会考古学 (Sotsiologicheskaya Arkheologiya)
- (3) 記述考古学 (Diskriptivnaya Arkheologiya)
- (4) 技術考古学 (Tekhnologicheskaya Arkheologiya)
- (5) 生態考古学 (Ekologicheskaya Arkheologiya)
- (6) 理論考古学 (Strogaya Arkheologiya)
- (7) 民族考古学 (Etnologicheskaya Arkheologiya)

以下、それぞれの特徴についてバルキンとレベジェフに従い概観しておきたい。

ソヴィエト考古学においては、考古学を歴史学の特権化された一部門であるとする研究者が多い。「考古歴史学」とは、その考え方をより急進的に主張するものと評価される。かつてアルツィホフスキー (A. V. Artsikhovskii) は、考古学とは「スコップを装備した歴史学」であるというフレーズを好んだというが (Lebedev 1992: 433)、この流れは、彼の弟子でアカデミー会員のリバコフ (B. A. Rybakov) によって継承された。リバコフは、考古学研究所の中枢に30年にわたり「君臨」し、その流れを主導

した。しかし一方で、このリバコフの視座は、単純に考古学を歴史学の一部としてみなすもので、考古学に特有の理論の必要性を意識しないばかりか、考古学独自の方法論をも軽視しているという批判もなされている (Formozov 1961など)。

ソヴィエト考古学における社会考古学とは、ソヴィエト内における様々な社会学的な研究と関係しながら発達したものと評価されている。この研究の流れは、ペテルブルクの考古学研究所 (現在の物質文化史研究所) の研究者に見ることができ、代表的なものとして中央アジアをフィールドとし、初期農耕社会から国家形成過程を研究したマッソン (V. M. Masson) やグリャエフ (V. I. Gulyaev) の研究が挙げられている。彼らの研究は、文化唯物論の枠組みで実践されており、チャイルド (V. G. Childe) やブレイドウッド (R. J. Braidwood) らの研究に加えて、プロセス考古学の用語を多用する点にその特徴がある。

記述考古学と位置づけられるものは、1950年代末から60年代初頭にかけて成立した流れで、考古学資料の厳格な性格付けを求める点にその特徴があるとされる。記述考古学の萌芽は、1920年代のエフィメンコ (P. P. Efimenko) やグリャズノフ (M. P. Gryaznov) に辿れることができるが、60年代に各地の大学において活発に展開された。この動きを実践した代表的な研究者として、モスクワ大学のフョードロフ・ダヴィドフ (G. A. Fedorov-Davydov) やデオピク (D. V. Deopyk), ウラル大学のゲーニング (V. Kh. Gening) とヴィクトロヴァ (V. D. Viktrova), イルクーツク大学のメドヴェージェフ (G. I. Medvedev) などが挙げられる。国立博物館においてもモスクワの歴史博物館のフェフネル (M. Kh. Fekhner) やガーゼ・ラッポポルト (M. G. Gaaze-Rappoport), エルミタージュ美術館のマルシャーク (B. I. Marshak) やシェル (Ya. A. Sher) の研究もこの流れに位置づけられている。

この「記述 (diskript)」という用語は、所謂一般的な理解での単純な記述を意味したものではない。歴史科学としての考古学の独自性を定義づけているものは、物質資料そのものである。その他の歴史記録と対照的に物質資料は、本来の言語の意味と結びついてはいない。にもかかわらず、歴史的情報をもたらしていることから、考古学者が理解する物質的痕跡から言語をソートする必要があるとみなされている。この流れはいくつかの側面、その客観性においてガルデン (J. K. Gardin) などのフランスの記述考古学やイギリスのクラーク (D. Clark) の分析考古学と類似している。西側における状況と同様に、特殊な用語、コンピューターの利用、数理的、数学的手法の利用を好む傾向が見られる。具体的に「遺物」、「型式」、「階層」、「考古文化」などの基礎的な分析概念への適用が試みられた。

考古技術学は、1960年代から1970年代初頭に科学アカデミーの研究所を中心に推進された流れである。物質資料から具体的な「労働」の痕跡を抽出することを目指し様々な手法の開発が図られた。技術考古学の主な流れと成果としては、フォルマコフスキー

(B. V. Formakovskii) の技術考古学, グリャズノフの使用痕研究 (痕跡考古学), セミョーノフ (S. A. Semyonov) の使用痕研究に基づく機能・技術研究が挙げられる。これらの研究は、自然科学的分析手法の考古学への導入の道を開拓し、胎土分析や金属分析の手法の開発を導いた。金属成分分析としてはチェルニーフ (E. N. Chernykh) やコルチン (B. A. Korchin) の研究, 土器の胎土分析としてはボブリンスキー (A. A. Bobrimskii) の研究などが知られている。

生態考古学は、古代社会と遺物の総体は、それを取り巻く環境との動的な相関関係、単一なシステムであると理解する流れである。この相関関係の研究が、古代の過去の人間社会を復元する上で重要な課題であると生態考古学者達は見なしている。彼らは過去の考古学文化の流れを生態系の機能と発達のモデルとして構築した。これらのモデルのいくつかは、かなり魅力的なものとして現在でも受け入れられている。この流れはすでに、19世紀後半のアヌーチン (D. A. Anutin) による「生態学的手法」にその起源を辿ることができるが、古生物学的研究や古気候学的研究を進めたグロモフ (V. I. Gromov) やピドプリチコ (I. G. Pidoplichiko), ドルハーノフ (P. M. Dorkhanov) の研究の研究に代表的事例を見ることができる。

西側の類似の研究としてはクラーク (G. Clark) やブツァー (K. Buttzer) の研究が知られているが、それらとは対照的にソヴィエトの生態考古学には、社会文化的発展の源泉を自然やサブシステム間の関係ではなく、生産力と生産関係に含まれる社会的生産の領域に求めている点の独自性がある。ソヴィエト考古学における、地質学的な研究との連携、考古学資料の解釈に地形学、古植物学、気象学などと連携して共同研究を進めてきたのはこの流れである。

理論考古学と呼ばれるものは、考古学資料の独自性の指摘に端を発し、独自の研究方法や用語の設定、研究の枠組みの整備を図ろうとした19世紀後半のコンダーコフ (N. P. Kondakov) の研究にその起源を辿ることができるとされる。この流れは革命後も1930年代にはキパリソフ (F. V. Kiparisov) に受け継がれた。考古学の基礎概念である「文化」、「型式」、「表象」、「人工遺物」などの定義を巡る議論が盛んに繰り返された。文化融合については、ロストフツェフ (M. I. Rostovtsev) の優れた試みがなされている。またコミュニケーション理論に基づく文化のメカニズムへの取り組み、情報網、文化情報についての検討も、同時に進められている。

ザハルク (Yu. N. Zakhark), クレイン (L. S. Klein) などの考古学のすべての時代を対象とした総括的な視点からの研究も知られているが、旧石器, 新石器, スラヴ民族起源, 中世, 古代ルーシなど時代ごとの取り組みも存在する。特に歴史資料との融合を図ったものとしてはヤーニン (V. L. Yanin) による古代ルーシの研究が代表的である。

民族考古学と呼ばれる流れは、一般に知られている「エスノ・アーケオロジー」とは

異なるものである。その特徴は、考古学的資料から歴史上に存在した民族集団の特徴を引き出し、具体的な民族集団の同定を図るもので、民族起源論 (ethnogenetics) と言った方が本来の意味に近いであろう。

この流れは、革命以前にはスピーツィン (A. A. Spitsyn) の「民族学的手法」に典型が見られる。この流れを引き継いだ研究としては、アルタモノフ (M. I. Artamonov) やグレコフ (B. N. Grekov) らによるスキタイの民族起源を巡る研究、スラヴ民族の起源に取り組んだアルタモノフやトレチャコフ (N. N. Trechakov) の研究がある。この研究を採用する研究者は、エスニックな指標が安定して存在すると見なし、文化的類似を民族集団の意味として理解している。エスニック・インディケーターと見なされる他と異なる文化的特徴を引き出すことに関心を寄せている、この研究によって「考古学文化」の同一性から、古代のエトノスが復元され、民族学的知識の文化的類似と「民族的特徴」の安定性が主張された。この手法に対しては、「考古学文化」と「エトノス：エスニック・グループ」を等式化する点において批判が加えられている。

これまでソヴィエト考古学は、その内部においても外部からの評価においても、独自の理論と手法を有しているとみなされてきた。しかし上述したように確かに一定の独自性の存在を指摘できる一方で、その流れは、ロシア革命以前の帝政期の考古学に系譜を辿ることができるものが多いことがわかる。

本論では、これらの中でも特に民族起源論について、革命以前のロシア考古学の中でどのような流れにその系統性を見出すことができるかを検討していきたい。ロシア考古学の学史的な研究については、いくつかの著作がすでに提示されている²⁾。本論では、ペテルブルク大学のレベジェフによる学史研究の成果 (Lebedev 1992) に沿って検討を進めていきたい。

3 革命以前のロシアにおける考古学の形成

ロシアにおける考古学的関心の芽生えも、その当初は他のヨーロッパ諸国と同様の傾向を有する。その初期は、ギリシャ・ローマの地中海文明の所産である古美術への関心と貴族社会における美術品収集に辿ることができる。広く知られているように、近代化の過程の中で当初は帝室や貴族の個人コレクションとして蓄えられた美術品は、やがて国家の資産として整備され、更なる収集を図りながら博物館の誕生へと発展していく。これらの収蔵品の体系的な整理と研究の中でロシアにおける考古学も、他の諸国と同様に次第に体系化されていった。

レベジェフは、ソヴィエト国家成立以前のロシア考古学を5つの時期に分けて概説している (Lebedev 1992)。その流れからは、ヨーロッパに共通する宮廷や貴族の個人コレクションから国家遺産へと移行する美術品や古代資料の社会的な位置づけと考古学

と国家の関係を読み取ることができる。レベジェフによる5期の区分は以下の通りとである。

1700～1825年：学術探検の時代

1826～1846年：アレーニン期

1846～1884年：ウヴァーロフ伯期

1884～1899年：ポスト・ウヴァーロフ伯期

1900～1917年：スピーツィン・ゴロドツォフ期

次においては、レベジェフによる整理に基づきながら、1700年から1884年までの時代の特徴と主な動きを見ていきたい。

3.1 学術探検の時代（1700～1825年）のロシア考古学

1700年から1825年までの時代は、ロシアにおける近代化と近代科学が導入された時期に重なる。この時期のロシアは、スウェーデンとの20年戦争を経て、ピョートル大帝（1671-1725）の下で国家の諸制度の西欧化を進め、近代国家としての体裁を整え始めていた。新たな首都の建設や、軍隊、海軍の整備と並んで学術、教育の改革も進められた。奇しくも記録に残るロシアで最初の考古学の発掘は、この時期に行われている。

この時期の考古学は、学術探検の過程でもたらされる各地の文物情報の集積、収集された資料を収蔵する施設としての博物館の創設、体系的な研究を行うための組織の設立という国家事業の中から生み出されたものである。当時のロシアにおいては、近代国家として国家の周縁の情報の収集、領域の確定、領土内の自然環境や資源の調査、住民（民族）の構成と人口に関する基礎データの収集が求められていた。この目的に従って地理学的な調査旅行が組織されたのである。これらの調査旅行は「学術旅行（Uchnye pucheshestviya）」と呼ばれ、この調査探検の過程で植物、動物学、鉱物学、地理学、民族誌学、測地学、天文学に関する資料が収集され、その一環としてクルガン（古墳）の発掘が実施され、シベリアから黄金製品が首都へともたらされた。

学術（探検）調査に際して行われた考古学調査として著名なものは、1700年から1727年の7年に亘るメッサーシュミット（D. G. Messerschmid）によるシベリア探検におけるアバカンでのクルガンの発掘調査や、1733年から1743年に実施された大シベリア探検隊に参加したミューラー（G. F. Miller）らによる1734年のウスチ・カーメンノゴルスクでのクルガンの調査、1768～1774年に組織されたウラル・シベリア探検隊におけるのパス（P. S. Pallas）によるクルガンの調査などがある³⁾。

この時期に資料が収集された背景には、有名なピョートル大帝が1718年2月18日に布告したクストカメラ⁴⁾創設の勅令と資料収集の布告が果たした功績が大きい。これらの資料収集を通じて、南ロシアからシベリア西部にかけてのクルガンとそれより出土する黄金製の副葬品に関心が向けられた。またピョートル大帝の治世下の学術の発展

として注目すべきものに研究組織としての帝室サンクト・ペテルブルク科学アカデミーの創設（1724年）が挙げられる。このようなピョートル大帝の治世下に進められた博物館の設立と研究組織の創成は、さらにエカテリーナ2世の治世下でのエルミタージュの建設とより一層増加される収蔵品の収集の動きへと発展していく。

ロシア考古学においては（ソヴィエト考古学でも同様であるが）、ロシア＝ソヴィエト考古学を「祖国考古学（Otchestvennaya arkheologiya）」と呼ぶ。この「祖国考古学」という概念の発生は、ロシア考古学における古代への関心の中に、自らの民族的帰属意識と民族の起源への関心が存在したことを示している。18世紀という時代は、周知のようにロシアに西欧文化が急速に流入し浸透する一方で、1773～1775年のプガチョフによる農民戦争や1789年のフランス革命とそれに引き続くヨーロッパの戦乱、そしてナポレオンのロシア遠征とそれに伴う祖国戦争を経験した時代でもある。この時期にロシアにおいては、民族の覚醒と民族の歴史の構築を求める動きが形成された。西欧諸国との対比の中でロシアの後進性が自覚される一方で、ギリシャやローマ世界を対象とした古典考古学とは異なる、自民族の系譜を追及することを目的としたスラヴ・ロシア考古学が形成されてくる。

この動きは、すでに19世紀初頭に明瞭に見ることができる。1804年、モスクワ大学に「ロシア史と古代協会」が設立され、1816年にはペテルブルクに「ロシア・スラヴ学愛好者協会」が結成されている。これらの組織において古代のノヴゴロドやプスコフ、キエフに関する著作を発表していたボルホヴィチノフ（E. A. Bolkhovitinov）は、1827～1837年にキエフで9世紀の教会の発掘を行っている（Lebedev 1992: 65）。これは、文献的なスラヴ民族の研究を考古学的な発掘を通じて検証するという最初の具体的な試みと評価でき、ここにスラヴ・ロシア考古学の萌芽を見ることができるであろう。

ロシアにおける19世紀前半の考古学は、このような新たなスラヴ・ロシア考古学の萌芽の動きが見られる一方で、独立した動きにはならなかった。未だ考古学としての多くの関心は、引き続き古代ギリシャやローマの史料学、文学、哲学、建築学、芸術学などの古典考古学へ向けられていたのである。

3.2 アレーニン期——帝立ロシア考古学協会の創設

アレーニン（A. N. Olenin）は、エカテリーナ時代に活躍した研究者の1人として知られている。彼によって芸術アカデミーが創設され、アカデミーを中心とした学術研究が花開いた。アレーニンは考古学にも深い関心を寄せていた。イリアーデを考古学的なコメントを含めて翻訳したり、エルミタージュへのスキタイ関連資料の収蔵に力を注いだり、シャンポリオンが解説したヒエログリフの複製を作成したりという活動（Lebedev 1992: 75）にその関心を見ることができる。

この時代のロシア考古学は、黒海沿岸のステップ地帯に広がる騎馬民族の遺産である

スキタイ文化の研究が深化するとともに、初めて考古学の全国組織が結成された時期でもある。この動きに合わせて、前時代にその萌芽的様相を示してきたスラヴ民族やロシア民族に関する研究領域も次第に厚みを増していった。

18世紀終末から19世紀前半のロシアにおける従来の古典考古学への関心は、同時代の西欧と同様に古美術主義を基調とし、美術品の収集を主に目的としたものであった。この時期に黄金製品の獲得を目的とした数多くのクルガンの発掘が行われている。この時期の発掘として代表的なものに1830年にケルチ近郊で実施されたスキタイ文化のクリ・オバ・クルガンの発掘、またエルミタージュに現在収蔵されている「黄金のクルガン」の発掘を挙げることができる。このような黒海沿岸地域のスキタイ文化のクルガンの調査事例の増加と出土資料のエルミタージュへの収蔵は、後の黒海沿岸地域の考古学の基礎となった。

ロシア考古学史において、この時期を重要な転機とみなす理由の1つに、後に世界有数の博物館施設へと発展するエルミタージュ美術館（当時は帝室エルミタージュ Imperatorskaya Ermitazh）の整備が挙げられる。さらに重要な点は、このエルミタージュ内にロシアで最初の考古学研究組織である帝立ロシア考古学協会が設立された点を指摘できる。

帝室エルミタージュは、宮内庁の管轄下におかれた収蔵施設であり、当初は、黒海沿岸の主として古典期の遺跡からの出土資料を収蔵することを目的としていた。1837年の火災の後に再建された冬宮には、博物館コレクションを収蔵するための新しいエルミタージュが建設された。この建設は、ほぼ10年（1840～1849年）を要している。正式なエルミタージュの開館は1852年であり、最初に創設された部門は、古代、古銭、様々な石製品、彫刻を収蔵する第1部門であった。

帝立ロシア考古学協会 (Imperatorskoe Russkoe Arkheologicheskoe Obshchestvo) の設立は、1846年である。その代表には、当時の大貴族の一人であるマクシミリアン・レイフテンベルグスキー公爵が就任している。またこの協会の設立メンバーには、宮内庁長官のボルコンスキー公、カフカス総督ヴォロンツォフ公、人民教育長官であるウヴァーロフ伯が名を連ねており、この動きが国家主導であったことがわかる。

協会は当初「考古学・古銭学協会 (Arkheologo-numizmaticheskogo obshchetvo)」と名付けられ、紀要はフランス語で刊行された。1851年に「考古学・古銭学協会」は、その名称を「ロシア考古学協会 (Rucckoe Arkheologicheskoe Obshchestvo — RAO)」と改称する。協会は次の3つの部門に分けられていた。

第1部門：ロシア・スラヴ考古学

第2部門：東洋考古学

第3部門：古代と西洋考古学

この区分から当時のロシアにおける考古学的関心の領域を知ることができる。専ら従

来の古典主義、古美術収集に基づいた考古学の流れを主体としつつ、これに当時、関心の深まりつつあったオリエント社会への関心を反映してアラブ世界を対象とした研究が組織されている点が注目できる。この動きは、他の機関においても指摘することができ、当時の人民教育長官であったウヴァーロフ伯爵 (S. S. Uvarov) は、「アジアアカデミー (Aziaskaya akademiya)」のプロジェクトを創設しており、またクンストカーメラに収蔵されていた古銭やアラブ世界の文書を基礎にクンストカーメラ内に「アジア博物館 (Aziatckii muzei)」が設立されていた。

これらの博物館施設に収蔵されていた資料の研究は、複数巻にわたり刊行された『古代』 (Drevnost') や、シベリア調査についての報告を掲載した『シベリア通報』 (Sibirskii Vestnik) にまとめられている。『シベリア通報』は、後に『アジア短報』 (Aziatckii Vestnik) と誌名を変えて刊行された。

この時期の考古学の特色は、古代ルーシのクルガンやノヴゴロド周辺の塚の調査が活発に行われた点にある。しかしながら、当時ヨーロッパで進みつつあった進化論的パラダイムの導入や、それに基づく先史世界を対象とした考古学への関心をここに見ることはできない。更に1836年にデンマークのトムセン (C. J. Thomsen 1788-1865) によって開発された3時期 (3時代) 区分法概念についても紹介されてはいなかった。

3.3 ウヴァーロフ伯爵と考古学大会の組織化

ロシア考古学にとって19世紀後半は、大きな転換期と評価できる。この時期にロシア考古学協会が組織化 (1846年) され、ロシアではじめて国立の考古学研究を統括する機関としての「考古学委員会 (Arkheologicheskaya komissiya)」が設立 (1859年) されている。加えて委員会による発掘の許可制度 (Otkrytnyi list) の導入 (1889年) など国立機関の整備と制度化された学問として考古学はその形を整えていく。中でも、定期的な全国学会としての考古学大会 (Arkheologicheskii Sezd) の組織化は、ロシア考古学内部に生まれてきた様々な領域や課題を整理し、ロシア考古学の課題として体系化する上で大きな役割を果たしたといえよう。

1850年代までロシア考古学には、進化主義は浸透しなかった (Лебедев 1992)。しかし、1850年代末に至るとその傾向に変化が生じ始める。この潮流の変化を促したのは、考古学者ではなく、自然科学者達であった。彼らにより新たな領域としての「原始考古学 (Pervobytnaya arkheologiya)」の領域が開拓され、3時期区分法の導入が図られるとともに、ロシア考古学に進化論的パラダイムが浸透していくこととなる。

ベル (K. M. Бэр 1792-1876) は、ロシアにおける発生学の創始者として知られている。またロシア地理学協会と科学アカデミー動物学博物館の設立者の1人でもある。彼は、1859年に地理学協会において「ヨーロッパにおける古代の住民 (O Drevneishikh obitatel'nykh Evropy)」と題する報告を行った。この報告の中で西ヨーロッパにおけ

る考古学の最新の報告を引用しつつ、古代の住民が絶滅した動物とともに存在した可能性、そしてロシアにおける石器時代の遺跡の探索の必要性和課題について報告している。

2年後には、彼を監修者として、3時期区分法の提唱者であるトムセンの後継者、ワラソー (J. A. A. Worsaae 1821-1885) の『コペンハーゲンの王立博物館における北方の古代』のロシア語の翻訳版 (Severnye drevnosti korolevckogo muzeya v Kopenhagene) (1861年) が出版されている。これにより北欧において確立された最初の体系的な先史時代の時期区分である石器時代、青銅器時代、鉄器時代という3時期区分法がロシアへ紹介されることとなった。ベルは、読者への巻頭言において3時期区分法についての解説を行っている。その内容は、各時代の特徴を述べるとともに、石器時代の人々の生活を狩猟・漁撈経済、青銅器時代を農耕、手工業の出現と商業の芽生え、鉄器時代をスカンジナビアの人々のローマ帝国との関係が成立する時期と評価したものであった。また原始史の確立、冶金技術の拡散、栽培植物 (文化植物) と家畜の起源の諸問題の解決、人類の経済・文化的発達の歴史の諸問題の解決については、アジアと西ヨーロッパの間に位置する国家であるロシアにおいてなされるべきとも主張している。

この時期にロシアに生じたこのような新しい動きは、なによりも若い世代の研究者に影響を及ぼした。その代表的な例がウヴァーロフ伯爵 (A. S. Uvarov) といえる。このウヴァーロフによって先に見た考古学大会など考古学の組織化が進められていくこととなる。

アレクセイ、ウヴァーロフは、人民教育長官で科学アカデミー総裁でもあったセルゲイ、ウヴァーロフ公の息子である。彼はペテルブルク大学に学んだ後、ベルリン大学とハイデルベルグ大学でも学び、やがてロシア考古学協会を中心に考古学者としての活動を始めるようになる。

1846年に18歳でサント・ペテルブルク考古学・古銭学協会会員となり、1年後には独自に黒海沿岸で考古学調査を実施している。調査結果は、『ロシア南部と黒海沿岸の古代に関する研究』 (Issledovanie o drevnostyakh yuzhnoi Rossii I beregov Chernogo morya) (1851-1856) と題した報告でロシア語とフランス語で刊行された。しかし、この最初の著作は、どちらかといえば古典考古学のカテゴリーに属するものであった。

1851年から1854年にかけてウヴァーロフは、サベリエフ (P. S. Savel'ev) と共に古代ルーシの大規模なクルガンの調査を組織している。4年間にわたるこの「ウラジーミル・クルガン」の調査では、7,757の古墳が調査され、また古代ルーシの農耕集落の存在が明らかにされた。このウラジーミル・クルガンの研究成果は、後に『クルガンの発掘に基づくメーリヤと彼らの生活様式』 (Merya i ikk byt po kurgannym raskopkam) と題され、第一回考古学大会の紀要として出版された (執筆は1869年、刊行は1871年)。この報告の中で彼は埋葬資料や出土遺物からこれらの遺構を残した部族について古文書

に現れるフィン・ウゴル語族であるメーリャと推定した。これはロシア考古学においてはじめて遺跡や考古学資料から古代のエトノスに迫ろうとした研究と位置づけられている (Lebedev 1992: 95)。

30歳を過ぎた頃からウヴァーロフの関心は、古典考古学から原始考古学へと移行していく。この動きは、先に指摘したように正に新しい段階に移行しつつあったロシア考古学自体の変化を反映したものと見える。彼の後半期の代表的な業績としては、1881年に出版された『ロシアの考古学—石器時代』(Arkheologiya Rossii. Kamennyi period)があるが、この中でウヴァーロフは、原始考古学の概要を提示するとともに、石器時代はどの民族にも存在すると述べている。考古学については、「歴史、同時に考古学、これら両者は、互いに諸民族の風俗についての総合科学である」と定義付けており、また「考古学は、個々の民族の古代の生活が残された、あるまたは不明の民族によるすべての遺跡についての諸民族の古代の生活を研究する科学である」とも位置づけた。

遺跡についても「諸民族の精神的な生活と知的発展の指標である」と定義し、この理解のためには、次の4点が重要であると主張している。それらは、(1) 遺跡がどのような場所で見つかり、またはどのように形成されたのか、(2) どのような状況で発見されたのか、(3) どの時期に位置づけられるのか、(4) 起源(民族、製作者)である。更に考古学を構成する領域として、1) 古文書学、2) 印章学、3) 古銭学、4) 芸術学、5) 地図をとまなう地理学、6) 年代学を想定していた様である (Lebedev 1992: 97-98)。

これらの視点は、当時としては、極めてまとまった完成度の高いものであり、ウヴァーロフは、初めて体系的に考古学の基本概念を説明しようとしたロシアの考古学者であったと位置付けることができる。

ウヴァーロフによるロシア考古学への功績として更に評価できる点は、1864年のモスクワ考古学協会の組織、また全ロシア考古学大会を組織したことである。

この考古学大会は3年に1度開催され、そこではロシア考古学の直面する考古学的課題が論じられた。第1回は1869年にモスクワ、第2回は1871年にペテルブルクにおいて、第3回は1874年にキエフにおいて開催された。第16回はプスクフにおいて1914年に開催が予定されていたが、第1次世界大戦によって中止となっており、最後の開催はノヴゴロドで開催された第15回であった。

それぞれの大会では、会ごとの課題が設定されていた。第1回考古学大会は130名の参加者に加えて、大会の貴賓としてデンマークからワラソーが招待されている。この第1回の考古学大会の共通課題は、ロシア考古学の確立のための用語統一を含めた方法論的諸問題であった。第2回考古学大会では3時代区分法が議論され、大会の構成は1) 先史考古学、2) ロシア・スラヴ考古学、3) 東方考古学、4) 古典・ビザンツ考古学および西洋考古学となっている。この大会の構成から、この段階に至って考古学の中

に明確に先史考古学の領域が加えられたことがわかる。

この考古学大会は、ロシア考古学の組織化という意味において大きな転機とみなすことができよう。第2回目以降各地方で開催され、地域的な考古学の様相の解明を図る一方で、ロシア考古学という全国的な組織化がこの組織の活動を通じて形成されたことは明らかである。本論が焦点をあてる民族起源論の系譜の探求という意味においては、考古学大会が各地を移動し、開催地ごとにそれぞれの地域の考古学の特性が検討されたことが重要である。各地域の考古学文化の具体的な担い手としてスラヴ民族をはじめとする様々な歴史的な民族を追及する試みがこの過程でなされた。これによって考古学を通じた歴史的な民族の掘り起こしや探求が試みられたのである。この過程は正に「民族の考古学 (Natsional'naya arkheologiya)」の形成過程とも評価できる。

4 「民族の考古学 (Natsional'naya arkheologiya)」の形成 — 1870年代の様相

以下では、この考古学大会を通じてどのように考古学文化と民族集団とを対比する議論が展開されていったのかを確認していきたい。

先に述べたように全ロシア考古学大会は、開催地を変え、その都度に各地域を特色づける領域の考古学が論じられた。第3回(1874年)は、キエフにおいて開催され、ウクライナと南ロシアにおけるスラヴ・ロシア考古学についての討議がなされている。第4回(1877年)は、カザンで開催され、ボルガ流域の考古学や東方考古学に加えてフィン・ウゴル考古学について議論がなされている。第5回(1881年)は、チフリスで開催され、コーカサス考古学について論じられた。第6回(1884年)は、オデッサにおいて黒海沿岸の古典考古学が、第9回(1893年)は、ビリニュスにおいて沿バルト考古学について、第10回(1896年)は、リガにおいて沿バルト考古学とベロルシア考古学が論じられた。

考古学大会は、地域ごとの考古学資料に検討を加えるとともに、地域色と民族色とを兼ね備えた考古学の領域を形成していく。中でもキエフにおいて開催された第3回の考古学大会は、スラヴ・ロシア考古学を取り上げており、「民族の考古学」という領域が形成される画期として評価することができる。

4.1 第3回考古学大会(キエフ) — スラヴ考古学の形成

1860年代は、スラヴ諸国において、スラヴ民族の考古学に関する資料の蓄積が進め得られた時期である。1863年にはベテルブルク大学の歴史・哲学部にスラヴ文献学講座が創設され、同時期にモスクワ大学やカザン大学、ハリコフ大学においても同様に開設されている(Lebedev 1992: 114)。この時期、スラヴ考古学の物質文化資料を用い

た調査研究の課題や方法論についての理解が深められた。

スラヴ考古学として最初に取り組みられたのは、集団を反映した特徴的な遺物の把握であった。スラヴ古代社会を指し示す明確な指標の抽出である。これは考古学文化としてのスラヴ考古学文化の認識を進める作業であり、遺跡をスラヴ民族の遺跡として同定する作業でもあった。資料の蓄積と各地での遺跡の確認は、過去のスラヴ民族の空間的分布、広がりをも提示することとなり、スラヴ民族の歴史的動態が追跡される。

一方でスラヴ民族の残した遺跡の把握、物質文化資料からのスラヴ考古学文化の抽出は、同時にスラヴ考古学文化とは別の「民族」の考古学文化の抽出も生み出していく。19世紀後半の中部ヨーロッパ、とりわけドイツのベルリン人類学・民族学・先史学協会のメンバーを中心に、波状文をもつ土器をスラヴ民族による土器と評価し、考古学的にスラヴ民族を示唆する指標として評価する見解が提示されていた。この視点は、普遍的かつ共通した物質文化資料を利用して特定の民族の分布を解釈しようとする動きであり、この型式の土器の出土する防御集落の分布圏がスラヴ民族文化の広がりとも一致すると理解されていた。

この動きを受けてロシアにおいても、同様の手法でブランデンブルク (N. E. Brandenburg) は、12世紀までのバルト地域のスラヴ民族とドイツ系住民の空間的分布が調べ、1896年に『スターラヤ・ラドガ』(Staraya Ladoga) としてまとめている。またこの時期の代表的なスラヴ考古学者の1人として挙げられるワルシャワ大学教授のサモクヴァーソフ (D. Ya. Samokvasov) も1873年にペテルブルクにおいて『ロシアの古代都市』(Drevnie goroda Rossii) を出版した。彼はドニエプル川流域のクルガンの調査を進め、1872年から1873年にかけてチョールナヤ・マギーラ・クルガンを発掘調査し、9世紀から10世紀の豊富な副葬品を確認している。調査の成果は、第3回考古学大会において「歴史としてのセヴェリヤンスクのクルガン (Severyanskii kurgan dlya istorii)」として報告された。これら一連のスラヴ考古学における研究成果は、1908年に『ロシア大地の墓』(Mogily Russkoi zemli) としてまとめられている。このブランデンブルグやサモクヴァーソフの研究は、この時期に明確にスラヴ民族の歴史の復元を目的とした「民族の考古学」としてのスラヴ考古学がロシア考古学中の重要な課題として定着したことを示しており学史的な転換期として注目する必要がある。

4.2 第4回考古学大会 (カサン) — フィン・ウゴル考古学の形成

第4回の考古学大会はカザンで開催された。この考古学大会において注目されるのは、フィン・ウゴル考古学が議論の対象とされ、そこにスラヴ考古学と同様の「民族の考古学」の形成をみとめることができる点である。

考古学的に物質文化を通じてスラヴ民族に対比できる考古学文化を認識するという作業は、当然にその過程において同時にスラヴ民族とは異なる別の集団を示唆する考古学

文化を抽出することとなる。とりわけユーラシアのステップや森林地帯においては、非スラヴ民族の考古学文化として、遊牧民としてのチュルク民族の文化的痕跡や定住民としてフィン・ウゴル民族の文化的痕跡の存在が指摘された。

先に見たウヴァーロフによるウラジーミル・クルガンの被葬者集団をフィン・ウゴル語族とみなす見解や、1858年にエラブギ近郊のアナニン墓地から出土した初期鉄器時代（紀元前9世紀～紀元前5世紀）の資料をフィン・ウゴル族に属するものとみなすネヴォストルーエフ（K. I. Nevostoruev）の見解が、この時点で既になされていた（報告は1869年の第1回考古学大会）。

しかし、具体的にこのフィン・ウゴル語族に属するとみなされた非スラヴ民族の考古学文化に深い関心を寄せ、研究を推進したのは、当時ロシア帝国に祖国を併合されていたフィンランド人の研究者たちであった。それらの研究者としては、アスペリン（I. R. Aspelin）やハックマン（A. Khakman）、タリグレン（A. Tal'gren）がいる。

当時、ヘルシンキ大学の教授であったアスペリンは、フィン・ウゴル考古学の基盤を組織するために古代研究フィンランド協会（Finlyandinskoe obshchetvo drevnostei）を設立し、1877年から1884年にかけて複数巻におよぶ『北方フィン・ウゴルの古代』をフランス語で刊行している。またアスペリンは1880年代に3度にわたりフィン・ウゴル民族の起源、チュルク文化研究を目的とした調査を西シベリアにおいて実施している（実施年は1887、1888、1889年）。

アスペリンの研究は、その後継者であるハックマンやタリグレンによって継承され、彼らの継続的研究により最初にアナニン墓地において注目されたアナニン文化は、遠く西シベリアのミヌシンスク盆地にまで広がりを見せることが確認される。

アスペリンは、1877年にカザンにおいて開催された第4回考古学大会において、「先史時代の遺物における遺物の形態とこれらの形態の段階的な発展の研究の必要性について」（O potrebnosti izcheniya form predmetov i postepennom etikh form v doistoricheskikh veshchakh）という報告を行っている。この研究は、考古学資料を型式学的観点から分析した研究として、極めて早いものであり、当時スウェーデンにおいてモンテリウス（O. Montelius 1843-1921）らによって進められていた型式学的研究の形成とほぼ期を一にするものであった。

この第4回考古学会議前後に形成されるフィン・ウゴル考古学の形成が、北ヨーロッパにおける考古学との強い影響を受けていた点、またその中核を当時ロシア帝国に組み込まれていたフィンランドの研究者によって推進された点は注目できる。ロシアにおけるスラヴ・ロシア考古学の発達とスラヴ民族の考古学文化の認定の過程で注視されるようになった非スラヴの考古学文化やフィン・ウゴル考古学という領域の創生の動きは、この時代に活発化する「民族の考古学」を特徴づけるものであるといえよう。

この動きはさらにトビリシで開催された第5回考古学会議とカフカス考古学への関心、

ビリニウスにおいて開催された第9回考古学大会と沿バルト考古学への関心へと地域の考古学の形成へ連動していく。

5 ロシア考古学における民族学派の形成

5.1 ヨーロッパ考古学における民族学派の勃興

1900年、ベルリン民族誌博物館の先史部門長であったフォース（A. Foss 1837-1906）は、土器の特徴的な様式に着目し、型式分布地図を作成する研究に着手する。この研究は、考古地理学的手法の先駆けとして位置づけることができる。この研究の特色は、それまでと異なり型式の示す文化的要素を単に年代学的指標として評価するに留まらず、領域・民族的同一性として理解するもので文化域の設定を目指すものであった。やがてこの手法はウィーンの民族誌学者たちにより推進されたことから「ウィーン文化史学派」と呼ばれている（Trigger 1989）。

この地理学的手法を考古学へ導入し、直接考古学文化から歴史的民族を同定することに応用し、民族文化や民族領域の領域復元を積極的に推進したのは、ベルリン大学で教鞭をとっていたコッシナ（G. Kossina 1858-1931）である。コッシナの手法は、「住地考古学（Siedlungsarchäologie）」と呼ばれる（Kossina 1911）。

コッシナの研究は、時代を経るに従い民族主義的な様相を強め、先史時代のインド・ゲルマン部族の北方から中部ヨーロッパを経て、黒海へ至る広がりや、メガリスやじょうご状カップや縄文を施した土器の分布によって裏付けたものであった。このコッシナによる研究手法には、次のような原理と方法に基づいていた（G. Kossina 1911; 1921）。

第1原理：考古学文化の民族的位置づけ（文化的集団は民族である）

第2原理：文化的連続性の民族的位置づけ（単一の民族的特徴の証明である）

第3原理：形式的関係の民族的位置づけ（文化の近似性は民族的近縁性を証明する）

第4原理：考古学的地図に示される文化の広がりやの移住行動の位置づけ

（文化領域の変化は移住を証明する）

第5原理：型式の民族的含意

（文化の地図すなわち型式の分布は民族の分布を反映したものである）

このコッシナの考古学的手法は、やがてウィーン学派のメンギーン（O. Menghin）などによって1930年代により強い民族主義的な様相を反映した研究へと引き継がれていく。一方でコッシナの手法はドイツ民族の起源論のみではなく、ポーランドの考古学者コストルジェフスキ（Yu. Kostrzhevskii）によってスラヴ民族文化の系統復元にも積極的に導入されている（Shennan 1991）。

このように、正に20世紀初頭のヨーロッパでは、とりわけ中部から東部ヨーロッパに

において、考古学文化を基礎とした歴史的な民族の空間分布とその動態を復元する研究が積極的に進められた。考古学は、この動きの中で過去の民族を復元する学問としての機能を発揮させていったのである⁵⁾。今私たちが検討しているロシア考古学における動向もこのような動きと無縁ではなかった。

5.2 革命以前のロシア考古学における民族理論

ヨーロッパにおける「民族の考古学」の動きは、ロシアにおいても同様の動きを見せる。19世紀末から20世紀初頭のロシア考古学は、先にみた考古学研究の組織や全国的な規模の学会の定例化、そして大学における研究者の育成が開始されるに従い、学問として確立するとともに、幾つかの研究手法の流れが生み出されていった。また教育研究機関としての役割を大学が果たすようになり、ペテルブルク大学とモスクワ大学などにおいて革命前後の激動期の考古学を担った数多くの研究者が育成されている。本論の論旨からは、外れるので深入りはできないが、各大学における考古学は、それぞれの創始者である研究者（例えばモスクワ大学のアヌーチンやペテルブルク大学のヴォルコフなど）の研究の基盤の特色を反映して、互いに違いを有している⁶⁾。その中にもいくつかの流れが存在することが既に指摘されている。（Ravdonikas 1930; Lebedev 1992）、それらの流れは、概ね次の4つの理論的・方法論の流れとして知られている。

第1は美術史の流れを汲むもので、「文化の型」を基本概念とし、考古学資料の文化史的解釈をもとめていくものである。オデッサのノヴォロシヤ大学でビザンチン文化の研究に優れた業績を挙げたコンダーコフ（N. P. Kondakov）の研究に代表的なものを見出せる。その手法は「様式」「イコン（記号）的視点」で物質文化資料を類別するもので、原始考古学の領域においては、文化の精神的側面の情報量がすくないため、自ずと「様式スタイルが民衆の精神」と理解され、最終的に「人種理論」とも結びついたとも非難された（Ravdomokas 1930）。

第2は帰納的・分析アプローチとよばれるもので、後に革命後の1930年代に「経験主義」として批判されたものである。ペテルブルク大学において教鞭をとったスピーツィンやミラーなど多くの前革命期の研究者にその潮流を認めることができるとされる。その手法は、研究者の関心に基づく、遺跡、文化、宗教など明確な研究対象を個別要素の分類から型式のレベル、文化のレベルへと積み上げていく（下部構造から上部構造へと積み上げる分類方式: Lebedev 1992）ものである。によって「経験主義アプローチ」が研究者の関心と結びついて見られるかどうかでなされた。要素の相関は、型の特徴を基本とし、型式の組み合わせが文化の基礎となるという視点にその理論的基本姿勢がある。

帰納的戦略（観察—特徴—経験的型式—考古学的文化）は、具体的な考古学文化を区分しようとするが、その内部の構造や法則性、発展の要素について明示することはない。代表的な研究とされるスピーツィンの研究の事例では、基本的に「民族学的アプローチ」

や資料を類型化する帰納法的戦略においてコッシナなどの手法と類似した傾向を見出せる。

第3の流れは、モスクワの歴史博物館やモスクワ大学を中心に活動したゴロドツォフ (V. A. Gorodtsov) の研究に見られる。「上位からの分類」と呼ばれる。階層を形成する分類された細胞 (最小単位) の網に資料を内包し、その後上位に位置するものから下に位置する階層へ段階的に選択するものである。このような構造は彼の『ロシアの先史時代土器』(Russkaya doistoricheskaya keramika) (1899) に見ることができる。またこの手法は旧石器時代の資料の分類にも用いられている。

第4の流れは、文化史研究アプローチで1920年代の西ヨーロッパにおける「住地考古学」は、考古学文化の解釈の方向性として新たな課題を提示するものであった。ロシアにおいては、この傾向をペテルブルク大学教授で著名なスキタイ研究者として知られ、革命後はアメリカに逃れてエール大学やウィスコンシン大学で教鞭をとったロストフツォエフ (M. I. Rostovtsev) の研究に見ることができる。特にスラヴ・ロシア考古学やスキタイ考古学などの領域に、強く傾向が現れた。またロストフツォフ以外にもスピーツィンやゴロドツォフの研究にも特に後半期に明確に文化史的手法が示されており、当時の研究の主流的戦略と位置づけることができる。

これらの中で本論との関係で重要なものは、スピーツィンやゴロドツォフなどの研究に現れた考古学文化をエトノスと対比し、具体的な民族集団の復元に応用する民族学的手法がある。ウィーン学派的な明確な「人種・民族理論」は、ロシア考古学内部に顕在化することはなかったといわれる (Lebedev 1992: 401)。しかし、考古学資料の中にスラヴやフィンとの差異を追及する動きや、チュルクや異民族の文化に着目する研究などが活発化するこの時期の研究は、同時代のヨーロッパにおける問題意識と同様のものを見いだすことが可能である。

スピーツィンによる『人民教育省雑誌8号』(1899年) に掲載された「考古学資料に基づく古代ロシア部族の拡散」(Rasselenie drevnerusskikh premen po arkheologii) には、考古学文化を民族文化パラダイムに基づいて民族史として解釈する彼の明確な意図が見て取れる。またスピーツィンは、ウヴァーロフによって調査されたウラジーミル・クルガンの出土資料の再分析を行い1905年に再出版している。このような古代スラヴ・ロシアのクルガンの調査を含むスピーツィンの打ち立てた方向性は、レブニコフ (N. N. Repnikov), フヴォイコ (V. V. Khvoiko), フォルマコフスキーらによる古代ルーシの諸都市の研究へと継承されていく。

一方、ゴロドツォフは1908年に『原始考古学』(Perbobytnaya arkheologiya) や1910年に『生業考古学』(Bytavaya arkheologiya) を著し、独自の歴史科学としての考古学の確立を目指そうとした。『原始考古学』においては、考古学資料に基づく考古編年学の確立を重要視し、技術的進化的変遷観を強く打ち出している。そしてその

編年的流れの中に「一般文化史的法則 (general'nnye kul'torno-istoricheskie zakonomernosti)」を見出そうとした。

また『生業考古学』においては、広く文明史の中で諸文明やスキタイなどの諸民族の興亡を集落の研究を通じて描きだすことを試みている。考古学文化の細分の過程においては、スラヴ民族以外にもチュルク、ポーロヴェッツやフィン・ウゴルなどの諸集団にも目が配られている。これらスピーツインやゴロドツォフによる研究は、考古学文化と民族との関係においてスキタイをめぐる諸問題やスラヴ・ロシア民族形成の問題としての「ヴァリャーグ問題」などに話題を提供することになる。

スピーツインは1911年に『スキタイとハルシュタット』(Skify i Gal'shtatt) を発表し、さらに後に『スキタイ・パハラのクルガン』(Kurgany skify-pakharei) を著した。これらの著作の中でスピーツインは詳細にステップ地帯のスキタイの考古学文化を地図化することに成功しており、この研究成果はロストフツェフや彼の教え子のルデンコらに継承された。

スキタイに関する問題と同様に古代スラヴ民族に関する問題も広く関心呼び起こすこととなった。ヤロスラヴやウラジーミルのクルガンの発掘資料、スターラヤ・ラドガのゼムリャンヌイ土城の資料は、ロシアにおけるノルマンの活動痕跡を示すものとして多くの研究者の関心を集めた。これを受けてスウェーデンの考古学者アルネ (T. Arne 1875-1969) は、1914年に『スウェーデンと東方—バイキング時代のスウェーデンと東方との関係の考古学的研究』(*La Suède et l'Orient: études archéologiques sur les relations de la Suède et de l'Orient pendant l'âge des viking*) を著している。このように、これまで文献的に論じられてきたスラヴ世界とスカンジナビアとの接触問題が「ヴァリャーグ問題」としてこの時期から考古学的資料からも論じられるようになる。

19世紀の後半から20世紀初頭にかけては、ロシア考古学においても他のヨーロッパ各地の状況と同様に考古学研究と民族の系譜との対比が積極的に進められ、その中において帝国内部の各地の民族の意識の覚醒も進んでいったのである。

6 ロシア考古学からソヴィエト考古学へ—民族起源論の系譜

1917年のロシア革命は、世界初の社会主義国家を成立させた。この社会主義国家の誕生は、革命以降に成立する独特の研究理論と手法を有するソヴィエト考古学の成立を導いたと評価されてきている (Trigger 1989など)。

確かに、10月革命以降、政治的激動の中で考古学を取り巻く環境も大きく変化していったことは事実である。1919年の物質文化史ロシアアカデミー (Rossiiskaya Akademiya Istorii Material'noi Kur'tory: RAIMK) の設立と1926年の国立アカデミー (Gosdarstvennaya Alademiya istorii Material'noi Kur'tory: GAIMK) への改

称、1922年のペテルブルク大学における社会科学部への考古学科の設置と1924年のモスクワ大学における考古学・造形芸術学研究所の設置、またロシア社会科学学術研究者研究組織協会の創設などに、その変化を見ることができる⁷⁾。

しかし、この時期、体制の変化とともに研究者も入れ替わった訳ではない。新たな動きの中心となったのは、旧帝政時代の考古学者達であり、ロシア考古学からソヴィエト考古学への移行という現象は、比較的穏健に革命以前の流れを継承させつつ進められていた。国立アカデミー物質文化史研究所のメンバーにしても、1920年代まではアヌーチンやベルトリト、ゴロドツォフ、スピーツィンなどが見られる。この流れが急速に転換し、革命以前の考古学をブルジョア的として強く否定する動きが生じるのは、1920年代後半から30年代のことである。以降ソヴィエト考古学は、旧帝政期を知る世代の追放と迫害、革命世代による新たな独自の理論体系と方法論への移行が試みられていく。この過程においてマルクス主義の枠組みの中での歴史的発展段階の法則や原理を説明するある種の武器として、考古学は一定の社会的役割を認められるようになるのである。

民族に関しては、とりわけ、民族と言語の多様性を連邦内に内包するソ連邦において、その多様性が認められる一方で、国家に準ずる組織を持てる民族（ナロード）とそれを持ってない少数民族（ナロードノスチ）という構図が確立され、さらに歴史的発展段階や民族形成過程として描かれることとなった⁸⁾。ソヴィエト考古学は、このような政治的社会的状況下の中で取り組むべき重要課題として民族起源論に取り組んできたと理解されている（Trigger 1989; Bulkin, Klejn and Lebedev 1982）。

しかし、このような説明をもって、果たして民族起源論という視点がソヴィエト考古学に固有の視点と評価することが可能であろうか。確かにこれまでは、民族起源論は、ソヴィエト考古学を特色づける概念のひとつとして指摘されてきた。プロムレイ（Yu. V. Bromlej）が指摘するように新たに蓄積される民族誌資料を歴史的に評価するために考古学や人類学のデータを駆使し、民族起源論を形成してきた（プロムレイ 1974）。しかしながら、一方で考古学的に民族集団の実体を反映すると仮定されてきた「考古学文化」の評価については、ソヴィエト期を通じて一貫したものではなく、幾度となく考古学文化を生み出すものについての議論が交わされてきている（加藤 2007: 294-295）。

繰り返される根拠と資料、なぜに考古学的物質文化のまとまりに民族集団を見出さねばならないのかという問いは、ソヴィエト期の考古学や人類学に限ったものなのであろうか。またソヴィエト期を迎えて初めて生み出された新たな理論なのであろうか。

本論でこれまで見てきたように、革命以前のロシアにおける近代科学としての考古学が整備されていく過程は、明らかに他のヨーロッパ諸国、とりわけ新興国家における動きと同様のものであった。近代国家の形成過程と時を同じくして「ナロードの考古学」、そして「ナーツィアの考古学」つまり「スラヴ・ロシア民族の考古学」の形成の動きがなされている事実を指摘できる。

- 今一度ロシアにおける考古学の形成過程を改めてまとめてみると、次のようになる。
- 18世紀まで：古代ギリシャ・ローマの古典考古学とは異なる考古学世界としての、「バルバロス」世界としてのスキタイ考古学の世界への関心の高まり。
 - 19世紀前半：クルガンの調査の蓄積から導かれたスラヴ・ロシア民族の考古学世界への関心の萌芽。
 - 1859年以降：3時期区分法の紹介や、ヨーロッパ世界との知的交流と博物館の整備に伴う資料の蓄積とロシア民族文化への関心の高まり。
 - 1864年以降：考古学研究組織の確立と定例的な学会の組織化の中で構築される領域考古学の形成とロシア帝国内の多様な民族の歴史と考古学文化の対比を通じた「ナロード・ナーツィアの考古学」の形成。

伝統的な前近代的な古典考古学と離れて形成される先史考古学の領域の中に民族文化の形成される過程を描き出そうとする動きが生じてきた過程は、北欧諸国における先史考古学の形成と同一の動きであると評価できよう。そこにはギリシャ・ローマ世界、地中海文明の外側という共通の地理的位置づけも浮かび上がってくる。

考古学文化概念の導入と型式学的手法の導入は、考古学文化=エトノスという概念の導入へと結びつけられる。このことは、既にみたように特徴的な物質文化資料の分布をスラヴ民族の領域へと対比する手法に明確に示されている。

また重要な点は、スラヴ・ロシア民族文化の境界の明確化の過程が単にロシア帝国におけるスラヴ民族の系譜を対象としたものに留まらなかったことである。スラヴ民族に対比される考古学文化の領域設定は、当然のごとく別の考古学文化を浮かび上がられることとなり、他の民族集団の認定とその領域の復元という側面を生み出した。この動きは研究手法において北欧諸国の考古学が主導的役割を果たしていたこととも連動して、フィン・ウゴル集団の考古学や、スキタイやチュルクの考古学という領域も生み出した。これらの成果は、先に見たように考古学大会の主題として取り上げられていることから明らかである。

このように構築されてきた「民族の考古学：ナロードおよびナーツィアの考古学」は、帝政末期からソヴィエト期への移行期の考古学会をリードした研究者たちによってソヴィエト考古学へ継承されていく。そしてソヴィエト期においては、ほぼ同様の考古学文化の概念が、国家をもたない少数民族ナロードナスチの民族史の復元に適用されていくのである。19世紀から20世紀初頭にかけての考古学が取り組んできた考古学文化をめぐる問題、つまり考古学文化が示唆する実態とは何であるのか、物質文化に表象されるアイデンティティとエスニシティの問題は、ソヴィエト考古学にもそのまま引き継がれていく⁹⁾。

近代国家の形成において考古学が果たしてきた役割を考える際に興味深い点は、北欧や中欧、そして東欧など近代国家の形成が西欧に比べて遅れた国家においてより強く考

古学文化とエトノスをめぐる問題が注目され、多くの議論を巻き起こしてきたことである。またロシア帝国内におけるフィンランドやポーランド、そして多くの民族集団について多くの活発な議論が展開されたことは、改めて注目する必要がある。

この出発点に立つと、改めてソヴィエト期における「民族起源論」については、他の学問領域との相関性の検討が必要となってくる。更に稿を改めて検討を加えていく必要がある。

注

- 1) 民族起源論は、考古学の領域においてかならずしもメジャーな領域でない。とりわけユーラシアを研究対象とする日本人研究者の関心としては、議論を生むこともなかった。その意味では2004年から2007年まで国立民族学博物館で組織された「ポスト社会主義における民族学的知識の位相と効用——制度としての人類学の多元性解明にむけて」の共同研究では、さまざまな領域の研究者との意見交流を通じて、多くの刺激と新たな視点を得ることができた、研究代表を始め共同研究のメンバーには、深く感謝する。
- 2) ロシア考古学史またはソヴィエト考古学史としては、本論でとりあげたレベジェフによる『祖国考古学史』(1992, *Istoriya Ochestvennoi Arkheologii*, Izdatel'stvo S-Peteruburskogo universiteta) の他にゲーニング (V. F. Gening) による『ソヴィエト考古学史概要』(1982, *Ocherki po istorii Sovetskoi Arkheologii*, Kiev) やフォリモゾフによる『ロシア考古学史概要』(1961 *Ocherki po istorii Russkoi Arkheologii*, Moskva), 『ロシア考古学史の数ページ』(1986 *Stranitsy istorii Russkoi Arkheologii*, Moskva) などがある。
- 3) 最初の1724年に創設された科学アカデミーの教授陣は、ドイツから招聘された研究者であった。メッサーシュミットもハレ大学を修了しており (1707年)、ミュラーもライプチヒ大学を修了したのちロシアへ招かれている。外国人研究者の手によってロシア史研究の基礎が創設された点は興味深い。この近代科学の外国人研究者による導入という特徴は、アジア諸国を含めて近代を西洋におくれて導入した社会に共通した傾向である。近代科学のもつオリエンタリズム、その後の歴史科学の秘めたナショナリズムの形成を考える上で重要なポイントと言えよう。
- 4) クンストカメラ (Kunst kamera) は、ロシアで最初の博物館施設であり、美術品や科学資料を収蔵する場所として、「クンストカメラ」という名称が与えられた。その基礎はピョートル大帝の個人コレクションを主体とし、1714年に首都をモスクワからベテルブルクへ遷都する際に図書館と合わせて創設された。当初は非公開であったが1719年以降スモリヌイ修道院近くへ移転する際に、公開を前提とした公共博物館となった。ワシリエフスキー島に建物が完成したのは、1727年である。同様の名称のクンストカメラとしては、17世紀にデンマークのコペンハーゲンにフリードリッヒ3世によって創設されたものが知られている。現在は「ロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学・民族誌学博物館」となっている。
- 5) このような民族史の復元としての考古学の応用は、19世紀の近代国家の形成、国家史の構築の必要性という時代の影響を強く受けたものであることを認識する必要がある。さらに民族史の構築と先史考古学との結び付きや、方法論の開拓がヨーロッパの中でも北欧や中・東欧など新興国家において目覚ましいことは偶然ではない。西欧に遅れて近代国家化しつつあった新興国家にとっては、自国史、自民族史が国民アイデンティティの形成においても極めて重要であった。

その中で考古学の重要性が社会的に評価されている点が重要である。考古学と民族の関係については、部分的に述べたことがあるので参照いただければ幸いである（加藤 2005；2007）。

- 6) アヌーチンによるモスクワ大学に創設された学派は、地理学や人類学としての方向性を強く打ちだし、ペテルブルクにおける流れとは異なる。またペテルブルク大学においてもヴォルコフの下では、古民族学派と呼ばれる独自の研究手法が進められ、スピーツィンらとはまた異なる流れが展開していた。これらについては、稿を改めて論じたい。
- 7) ロシア物質文化アカデミーの設立の布告は、1919年4月18日にソヴィエト人民会議議長レーニンの名によりなされている。ソヴィエト政権によって設置された「物質文化史」研究という方向性、社会科学の中への考古学の位置づけなど、新たな国家がめざす歴史観を知る上でも、考古学のソヴィエト国家内での位置づけを考える上でも、1920年代から30年代にかけてのソヴィエト考古学と国家の関わりは興味深い点が数多くある。ペテルブルクにロシア物質文化アカデミーの設立が布告されるまたモスクワではこれら1920年代前半の新たな研究機関の創設がソヴィエト考古学の発足として評価されている。
- 8) ソヴィエトにおける民族理論と言語の問題、エトノスをめぐっては詳細な田中克彦による検討がなされている（田中 1975）。本論でもそこにおける議論を参考にさせていただいた。また近年では岩波現代文庫にまとめられ手に取りやすくなっている（田中 2001）。
- 9) 1920年代後半に教条主義的なマルクス主義に従い、考古学からエトノスや型式学を排除し、社会復元に重点をおいた研究の実践が叫ばれる時期があるが、これも長くは続いていない（Bulkin et al. 1982；加藤 2007：294）。1930年代には民族誌研究の活発化が見られ、考古学も民族の歴史の構築に寄与する資料の提供を求められている（Bullin et al. 1982）。

文 献

- Brandenburg, N. E. (Бранденбург, Н. Е.)
1896 *Старая Ладога*. С-Петербург.
ブロムレイ, Yu. A.
1974 『マルクス主義と人類文化の起源』中島寿雄訳, 大槻書店。
- Bulkin, V. A., L. S. Klejn, and G. S. Lebedev
1982 Attainments and Problems of Soviet Archaeology. *World Archaeology* 13: 272-295.
- Formozov, A. A. (Формозов, А. А.)
1961 *Очерки истории русской археологии*. Москва: Наука.
Genig, V. F. (Гениг, В. Ф.)
1982 *Очерки по истории Советской археологии*. Киев: Наукова Думка.
- Jones, S.
1997 *The Archaeology of Ethnicity: Constructing Identities in the Past and Present*. London and New York: Routledge.
- 加藤博文
1999 「北東アジア沿岸地域における移動と交流の時代——「民族集団」形成過程とその背景」『筑波大学地域研究』17：249-285。
2000 「北アジアにおける民族起源論の成立と考古学——アムール下流域における事例」『筑波大学地域研究』18：123-140。

- 2005 「『考古学的文化』の変容とエスニシティの形成——北海道島における考古学的エスニシティ論の試み」海交史研究会編『海と考古学』pp. 61-86, 東京：六一書房。
- 2007 「第12章 考古学文化とエスニシティ」煎本孝・山田孝子編『北の民の人類学』pp. 287-316, 京都：京都大学学術出版会。
- Kossina, G.
 1911 *Die Herkunft der Germanen*. Leipzig: Kabitzsch.
 1921 *Die Deutsche Vorgeschichte: eine Hervorragend Nationale Wissenschaft*. (Mannus-Bibliothek 9), Johann Ambrosius Barth-Verlag, Leipzig.
- Lebedev, G. S. (Лебедев, Г. С.)
 1992 *История отечественной археологии*. Санкт. Петербург: Издательство Санкт Петербургского университета.
- Ravdonikas, V. I. (Равдоникас, В. И.)
 1930 За марксистическую историю материальной культуры. *ИГАИМК* том. 7, вып. 3-4, Петербург.
- Shennan, S. J.
 1991 Some Current Issues in the Archaeological Identification of Past Peoples. *Archaeological Polona* 29: 29-37.
- 田中克彦
 1975 「ソ連邦における民族理論の展開——脱スターリン体制下の国家と言語」『思想』5月号, 595-615頁。
 2001 『言語からみた民族と国家』(岩波現代文庫・学術63) 東京：岩波書店。
- Trigger, B. G.
 1989 *A History of Archaeological Thought*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tikhonov, I. L. (Тихонов, И. Л.)
 2003 *Археология в Санкт-Петербургском университете*. Санкт. Петербург: Издательство Санкт Петербургского университета.